HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「し」と「から」の言いさし文における統語的特徴と語用論的機能
Author(s)	大山, 隆子
Citation	国語国文研究, 153, 80(15)-69(26)
Issue Date	2019-08-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/89719
Type	journal article
File Information	Kokugokokubunkenkyu_153_80(15)-69(26).pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

「し」と「から」の言いさし文における統語的特徴と語用論的機能

大　山　隆　子

1．はじめに

「し」と「から」は同じ接続助詞として分類されているが、両者とも、言いさし文としての使用が観察される。

「し」は本来、並立接続であるが、最近、若い世代を中心に「まだ、夏だし。」のように文末を下降調にし、言い切るように終える言いさし文が多く観察される。これらの言いさし文は、「婉曲的用法」などとは異なり、先行研究では扱われていない新しいタイプの言いさし文である。これらが「から」の言いさし文「まだ夏だから。」と比較するとどのような相違があるのか、若い世代に「し」の言いさし文が観察されるのはどのような理由なのか。「し」と「から」、そして、その言いさし文が持つ統語的特徴と語用論的機能の分析を通し、この問題を考える。

2．「し」と「から」の統語的特徴と先行研究

2.1　接続助詞「し」と「から」の機能差

加藤（2006：110-123）では、接続の種類について大きく二つに分けている。

一つ目は、前件を条件とし、後件に帰結を述べる「条件接続」であり、二つ目は前件に後件が付加されているとみる「列叙接続」である。また、この二つの接続は「二つの命題の論理関係に関わり、前件と後件の論理関係は緊密であるもの」「論理関係標示」と「二つの事態の捉え方に関わるもので、前件も後件も自立性が高く、意味的に依存し合わない関係にあるもの」「事態関係認識標示」に分けることができ、これはほぼ、「条件」と「列叙」に対応すると述べている。条件接続はさらに、仮定帰結関係、原因結果関係、譲歩帰結関係の３つに区分されている。一方、列叙接続の方は、単純接続、対照接続、並立接続、展開接続の４つに区分されている。

上記分類では、本研究に於ける「し」及び「から」は、接続助詞に分類され、「から」はその中で「原因結果関係」を示す条件接続の接続助詞とし、また「し」は「並立接続」を表す列叙接続の接続助詞とされている。

次に「から」と「し」の異なりとして、「から」には、原因・理由を確定する「～のは～からだ」という以下の例（3）の構文にすることにより前件を焦点化することができる。「どうして風邪を引いたのか。」の答えになり得るが、この場合、「し」では置き

換えられない。

つまり、前件と後件の結びつきが強い論理関係を表示する「から」の場合は、「～からだ」で「理由」の意味を表すことができる。一方「し」は例（2）も座りが悪いが、それを「から」と同じように例（4）の「～のは～しだ」とは形態論上できない。つまりこの場合は前件を焦点化できない。「し」は「から」と異なり「理由」を確定的に表すことはできない。「から」の方は「理由」が基本的用法である。一方「し」はある条件下では、「理由」を表すが、「並列」の場合も考えられる。「理由」を確定的に述べられるのは「から」であり、「し」ではない。従って、理由を確定し強調する場合は、「から」の方が適していると考えられる。「し」は同じように使用できないという制約がみられる。「から」はもともと、条件接続で論理関係標示の接続助詞であることも関係している。先にも述べたように「し」は前件と後件の事実を繋ぐ接続助詞である。この点が「し」と「から」の違いと考える。なお、以下、下線は筆者に拠る。

（1） クーラーをつけたままにしたから、風邪を引いた。
（2） クーラーをつけたままにしたし、風邪を引いた。
（3） 風邪を引いたのは、クーラーをつけたままにしたからだ。
（4） *風邪を引いたのは、クーラーをつけたままにしたしだ。

2.2 「し」の先行研究における記述

上記加藤（2006：110-115）「接続助詞の用法区分」では、「し」は事態関係認識標示（列叙接続：二つの事態の捉え方に関わる接続）であり、「並立接続」を表す接続助詞として分類されている。

統語的特徴として、南（1993：74-120）の従属句の分類[1]では、「し」はC類に分類されている。節内部にテンス・アスペクト・対事的モダリテイを含む事が可能である。

（5） この店は美味しかったし、また来たい。（テンス）
（6） 太郎は今勉強しているし、後で話すことにする。（アスペクト）
（7） 太郎が来るかもしれないし、もう少し待とう。（対事的モダリテイ）

「し」は従属節で、話し手の認識を示すことができ、節の独立性が高いと言える。

次に「し」の接続要素を見ると、聞き手への働きかけを表す、「命令形」、「意向形」、「疑問形」などには接続しない。

次に、国立国語研究所（1951：56-59）では「し」の意味用法として「一つの事実をあげて、他を言外に呼応させ、その全体を材料（理由）とする立論（判断）を導く。この場合、理由としてあげる材料が一つで、他を言外に暗示している形のため、婉曲

[1] 南（1993：74-120）では、従属句を「どのような要素を内部に含むことができるか」を基準として「A類、B類、C類、D類」に分類している

になる。」と述べている。下線は筆者による。

同じく、国立国語研究所（1951：56-59）では「し」の言いさしの意味用法として「言いさし（後続すべき立論を控えめに言外に響かせる。終助詞的用法。）」としている。

次に、森田（1984：176，177）では「し」の意味用法について、「「～し～し」の形で、複数の事実や条件をあげ、強調する。また、それらは、例示ではなく、現実の事実や条件である」としている。

同じく、森田（1984：176）では「し」の言いさしとしての意味用法について、「控え目にあるいは考え深げに言いさし、そこから導かれる結果や判断を言外に込める暗示的な表現」としている。

上記の先行研究では、「し」の言いさし文は「控え目に述べる」という記述が見られる。しかし、本稿の言いさし文はこれらの先行研究における言いさし文とは異なるものと考えられる。

2.3 「から」の先行研究による記述

加藤（2006：110-115）「接続助詞の用法区分」では、「から」は論理関係標示（条件接続：前件を条件として、後件に帰結を述べる接続）であり、「原因結果関係」を表す接続助詞として分類されている。

統語的特徴として、南（1993：74-120）の従属句の分類では「から」もC類に分類されている。テンス、アスペクト、対事的モダリテイを内部に含むことが可能である。

(8)　この店は美味しかったから、また来たい。（テンス）
(9)　太郎は今勉強しているから、後で話すことにする。（アスペクト）
(10)　太郎が来るかもしれないから、もう少し待とう。（対事的モダリテイ）

「から」の接続要素をみると、聞き手への働きかけを表す、「命令形」、「意向形」、「疑問形」などに「から」は接続しない。接続要素の面からは、前件「から節」では、聞き手への働きかけの機能は少なく主観的と言える。しかし白川（2009：37-68）の先行研究では、「～から」の後件には「依頼・命令・推量・意志・質問」などの表現が来ることが多いと述べている。

次に、国立国語研究所（1951：28-40）では、接続助詞「から」について、「原因・理由を表し、表現者が、前件を後件の原因・理由として、指定して結び付ける言い方であり、この用法において、「～は～からだ」の形で結果・帰結を先に述べて、原因・理由を後で説明する言い方もある」としている。

次に森田（1980：110-112）では、「から」について、「用言や終止形つまり、一つの文に相当する表現について、後件に述べる事柄の理由であることを示す」とし、「「から」は後続句で述べる事柄が生ずるきっかけ、理由、根拠などを先行句で主観的に捉え叙述する条件形式である」としている。

また、「から」は理由を表すと一般的に考えられているが、理由を表さないとされる用法もあるため、それを詳しく分析している白川（2009：40-68）を見ておく。白川

(2009：37-68) では、理由を表さない「から」があるとし、それらは、話し言葉で多く使用されるとしている。談話的な機能によって次の3つに分類している。

(1)　条件提示用法（S_2 に示された内容を実行する場合の条件を S_1 で提示する）
(11)　主人「こっちも本気で教えるからよ。」
　　繁　「はい」
　　主人「最低二年はつとめろよな」
　　繁　「はい、勿論」

(2)　お膳立て用法（S_1 は S_2 を聞き手が実行するための前提情報として提示される）
(12)　これから、英語の文章を読みますから、注意して聞いてください。

(3)　段取り用法（(S_1→ S_2) という筋書きを聞き手に提示するもの）
(13)　式場での参殿や起立、着席などの指示は全て式の世話役の典儀がやってくれますから、参列者はそれに従います。

そして、理由を表さない「から」の共通特徴として
① S_2 には、必ず、命令・禁止・依頼・勧誘など、聞き手に何らかの行為をするよう働きかける表現がくる。
② S_1 には聞き手に S_2 を実行させることを　1）可能にする情報（「お膳立て」用法・「段取り」用法）もしくは　2）促進する情報（「条件提示」用法）がくる。

この理由を表さない「から」は言いさし文の形で現れるのが群を抜いて多いとし[2]、その中でも「お膳立て用法」には言いさし文が圧倒的に多いと述べている。

3．本稿における言いさし文

本稿で扱う言いさし文は、下記の例のような言いさし文である。若い世代に観察され、白川（2009）の先行研究ではまだ扱われていなかった新しいタイプの言いさし文であり[3] 上記で述べた、国立国語研究所（1951）や森田（1984）の言う「控え目に言う」

[2] 白川（2009：51）では、「言いさし文」は「理由を表す」「から」にも多く、その多くが S_1 を提示することにより、聞き手に何らかの行為要求をする効果を生む場合であると述べている。また、「「言いさし文」は S_2 の部分が現れないため「完全文」について得られた一般化から類推的に説明することは慎重を期さなければならない」とも述べている。

[3] 栗原（2009：3-31）では「終助詞化した「し」とし、ブログの文章の中に見られる「し」の終助詞化用法を取り上げている。ブログの話題や内容が若年層を反映して

「し」とは異なるものであると思われる。これらの「～し。」は本来の並立用法から、文法制約の変化または、拡張的使用で生じたものと考えられる。

(14)　話、全然聞かないし。
(15)　大事な時、いないし。

「し」は本来、「あの店は美味しいし、安いし、また行きたい。」のような並列構造を持つ。しかし、上記例のように「し」が並列構造を持たず、単独で使用される場合が多く観察される。上記例では、「話、全然聞かない。」「大事な時、いない。」と「し」がない文でも、同じ意味は成り立つ。しかし、話し手は敢えて「し」を付加し、話し手の何らかの伝達態度を示しているものと思われる。統語上は、言いさして終わっている場合でもその並列性は持続している場合もあり得る。本来接続助詞である「し」が元々持っている並列接続の構造から、続く内容は推論可能であり、その潜在的並列性を話し手が戦略的に利用しているとも考えられる。話し手はその推論の過程を利用することにより、後件につなげるという構造制約を変化させてきたものとも考えられる。「し」の場合はもともと「a および b」と要素を累加していく性質を持つため、その根拠となるものが多ければ多いほど、話し手の判断の内容は確固たるものとなる。例え「し」で言い切り、本来なら理由が一つしかないような場合でも、聞き手の方は「し」で打ち切られたため、「きっと、まだ根拠はある」と推論せざるを得ないかもしれない。

4.「し」の言いさし文の語用論的機能

4.1　語用論的機能：談話標識について

加藤（2004：211-228）では、談話標識について以下のように述べている。

「談話標識の定義はいろいろあるが「論理つなぎ語（logical connectives）」や「談話つなぎ語（discourse connectives）」などと呼ばれ、日本語では「しかし」「だから」などの接続詞のほか「どうやら」「どうも」などの副詞類の分析が行われてきたと述べ、談話標識の定義を「談話上の目印で、言語運用に関する情報を提示するもの」とし、「発話に関する情報を談話標識によってあらかじめ提供することで、聞き手に、より適切な受容をさせる機能を持つもの」としている。加藤（2004：211-228）でも指摘しているように、談話上の目印が談話標識なのだとすれば意味する範囲は広くなり、接続に関わるマーカーはその一部でしかありえないことにもなる。特に日本語の場合は接続詞と同様の機能を持つ接続助詞があり、英語などの考え方とは異なるものと見られる。このような加藤（2004）の指摘を参考に、本稿では「接続助詞」も談話標識の機能を有するものとみて「し」及び「から」を分析対象とする[4]。

いるとし、終助詞化した「し」の使用を 20 代を中心とした若年層としている。

4.2 「し」と「から」の談話標識としての機能

下記例（16）は「2019年2月放送のTVCM」で「父と息子の絆を描くCM」と説明されているものである。息子の発話は全て独白となっている。「し」を使用した言いさし文が発話の大部分を占めている[5]。「し」の言いさし文は全て、文末を下降調に言い切るように終えるものである。これまで先行研究で扱われてきた「もう時間も遅いですし……」のような「控えめに理由を述べる」言いさし文とは、明らかに異なるタイプである。

例えば、息子3の発話「話、全然聞かないし。」で、話し手は「従属節し。」で言い切り、命題内容に対する話し手の伝達態度「相手はどう思うと、僕はそう考えている。これ以上この話題について議論の必要がない。打ち切りにする。発話内容については変更しない」という態度を示していると考えられる。元の並列構造から、潜在的に続く根拠により、強い反論を可能にしていると思われる。話し手は「し」で言い切り、あとは聞き手に推論させる方法をとっている。結論変更の可能性もないので「し」を並列させ、長く続ける必要はないと、聞き手に対する主張を強め、その効果を示すことができていると見られる。このデータは独白だが、相手が居たとしても、聞き手の存在を考慮しないかのように、自分の主張を通そうとする特徴があると考える。以上から、「し」は談話標識として「発話する情報についての話者自身の伝達上の態度」[6]を示す機能を持つ。相手と認識の相違がある場合は、話し手の「自分の意見を変えない」という態度や「不愉快な気持ち」を示す標識として機能していると見る。さらに、「聞き手」との認識の相違を示せることから、「相手の発話の受容のあり方に関する情報」を示す機能も持つ。元の「並列累加」の統語的特徴から、語用論的に機能が拡張したものと考えられる。

(16)
〔父の単身赴任先ベトナムの空港に息子が着く。〕
（　）の中は息子の独白として放映

父1：　いきなり呼んですまんな。こちら、ホアンさん。
息子1：(父は、自分勝手だ。)

---

[4] 詳しくは加藤（2004：227，228）を参照。
　本稿の接続助詞「し」及び「から」は、8つある機能の中で、⑤発話する情報についての話者自身の伝達上の態度を示すもの、⑥相手の発話の受容のあり方に関する情報を示すもの　この二つの機能を有すると考える。

[5] 本稿ではCMデータの一部分を掲載しているが、このCM全体で「し」の言いさし文が多い。

[6] 接続助詞は「伝達モダリテイ」とは異なるが、聞き手に伝えたい態度を示す上で、「伝達モダリテイ」に近いと考えられる。

父２：　母さん元気か？　二人だけで寂しいだろう。
息子２：（声、無駄にでかいし。）
父３：　ここね、春巻きもおいしいんだ。
息子３：（話、全然聞かないし。）
【NEXT IDEMITSU! CM　出光石油㈱「父の仕事篇」】

次に、下記例（17）のように、「し」の新しい言いさし文では、周囲との同一認識状況でも使用できるが、相手に賛同するというより、「（あなたに賛同するわけではなく）私は私で勝手にいいと思っている」という態度である。例（18）のように、反論には使用しやすく、文脈により、その伝達態度は異なると考えられる。

一方、「から」は、下記例のように周りとの同一認識状況では使用しにくく、反論に使用しやすいと言える。

(17)
A：　この音楽いいね。
B：？うん、いいから。
　　うん、いいし。
(18)
A：　これまずいね。
B：　いや、おいしいから。
　　いや、おいしいし。

(19)　テーブルの上に飲み物を置いておきますから。（あとはよろしくお願いします。）
(20)　テーブルの上に飲み物を置いておきますし。

上記例（19）（20）では、話し手が自分の行動予定を告知する場合や、話し手のみが持っている情報を告知する場合である。たいていの場合、これらの例は聞き手が踏み込みにくい情報である。従って、「から」及び「し」は、「話者が排他的に知識管理[7]する準備があることを示す命題に付くマーカー」である。従って「から」と「し」は「知識管理は話し手が行う」ものとする。「し」と「から」の語用論的機能の異なりは、上記例（19）（20）を見ると、「から」の場合は後件がなくても、話し手の意向が類推されやすい。しかし「し」の場合は、「から」と同じようには類推できないものと思われる。「し」は本来、並立の用法であり、最近の打ち切るような用法とは異なり、後件を

[7] 加藤（2001a：31-48）では、「排他的知識管理」については「話題になっている知識や情報に発話者のみが優先的にアクセスできる状況にあること」と説明している。本稿もそれに従う。

婉曲に控えめに言外に響かせる用法も見られる[8]。しかし「から」の表出していない後件は上記例では、「あとはよろしくお願いします。」や「飲んでください。」など、話し手の明確な要求が類推しやすい。

白川（2009：40-68）の研究では「から」の後件には、聞き手への何らかの行為を要求する表現がくるとしているが、比較してみると以下のようになる。

(21) うるさいから、(静かにしろ・静かにしてほしい・静かにしてください)。
(22)？うるさいし、(静かにしろ・静かにしてほしい・静かにしてください)。

上記例文は後件が「命令」などの行為要求である。この場合、「から」の方が自然である。

「し」の場合は、行為要求の文も推論可能ではあるが、「から」と比較すると「から」の方が後件に、禁止や依頼などの行為要求の文が類推しやすい。「し」の場合、話し手が相手の認識に対して異なる判断を示すことはあるが、明確な行為要求は「から」の方が適してる。「し」は、自分の意見を主張する方に主眼が置かれていると思われる。

談話標識としての「から」の機能は、「し」と同じく「発話する情報についての話者自身の伝達上の態度」及び「相手の発話の受容のあり方に関する情報を示す機能」を持つ。

また知識管理は話し手が行うが、「から」は「聞き手への受容要求」[9]が強い。話し手が、これが確固たる理由・根拠とするものを聞き手に強く主張することにより、聞き手に何らかの行動要求を促す。周りとの同一認識上で使用しにくい。

5.「し」と「から」の言いさし文

会話の中で「し」と「から」の両方が言いさし文として使用されているデータを見る。

以下の会話では、高校生が使用する言いさし文は「ロペ」と「アキラ」の発話であ

---

[8] 国立国語研究所（1951：56-59）の先行研究では、「し」の用法の中で、「言いさし」を取り上げ、「もう体の方もよくなりましたし……」の例をあげ、「後続すべき立論を控えめに言外に響かせる」としている。柔らかく終わる場合は、様々なデータでは表記の仕方を「し（接続助詞）……」などとしている。日本語記述文法研究会編（2017：293，294）では「し」で言い終わる文を取り上げ、「うん。でも、もう遅いし……」と表記し、説明として、「「し」で言い終わった場合は「それだけが理由というわけではないが」というニュアンスが込められ、語調をよりやわらげた表現になる」と説明している。

[9]「受容要求」とは「話し手の認識要求（相手の認識の異なりに反論する要求）を、相手が受け入れるべきだとする要求」とする。

る。

高校生の言いさし文の発話では主に「し」を使用し[10]、老人の言いさし文では「から」を使用しているのが非常に興味深いデータである。どのような談話効果を持って使用されているのか分析する。

(23)

老　人１：　ああ、もうここでいいです。
ロ　ペ１：　えっ？　中まで持っていってもいいですよ。
老　人２：　いや、いや、ほんと、君らと会えて助かりました。どうもありがとう。
アキラ１：　全然、方向一緒だし。ついで。
ロ　ペ２：　はい、じゃ、これ。（老人に買い物袋を渡す）
アキラ２：　じゃあな。じいさん。
老　人３：　あっ、ちょっと待って。
アキラ３：　うん？
老　人４：　はい、これ。
アキラ４：　いや、いいし。
老　人５：　いいから a。ちょっとしたお礼だから b。はい。
アキラ５：　えっ？　チョコ？　いや、いつもだったら、うれしいけど。
ロ　ペ３：　２月 14 日ですからね。
アキラ６：　タイミングが……。
ロ　ペ４：　そうですね。
アキラ７：　いや、ありがとう。来月３月 14 日、クッキー持ってくるから。
老　人６：　いや、そんな若い人が余計な気をつかなくていいですから。
アキラ８：　いや、気っうか、ルールだし。
ロ　ペ５：　そうっすね。

【ハッピーバレンタイン】『紙兎ロペ』（フジテレビ放送）

まず、これらの「し」及び「から」が「理由」を表しているかどうかを S_1 が「どうして」という質問の答えになるかどうかで見ると[11]、「アキラ４」の「し」と「老人 5a、老人６」の「から」は理由を表していないと考える。「アキラ１」では、「どうして、ついで？」の答えとして、「アキラ１」の発話「方向一緒だし」は「理由」となる。「アキラ４」では、「どうして、受け取らない？」の答えとして「アキラ４」の発話「いい

[10]「アキラ７」と「ロペ３」の「から」の言いさし文は高校生の発話である。

[11] 白川（2009：40-68）では、「理由」を表しているかどうかを S_1 が「どうして」という質問の答えになるかどうかで判断している。本稿のデータは「言いさし文」であるため、S_2 は、表出していないが、「どうして」という質問文を考えて S_1 が答えなるかを見る。

し。」は「理由」ではない。「老人 5a」では、「どうして、これをくれるの？」の答えとして「老人 5a」の発話「いいから」は理由ではない。「老人 5b」では、「どうして、これをくれるの？」の答えとして「老人 5b」の発話「ちょっとしたお礼だから」は「理由」となる。「ロペ 3」では、「どうして、嬉しくない？」の答えとして「ロペ 3」の発話「2 月 14 日ですから」は「3 月 14 日にお返しをしなければいけないから」とも考えられるため「理由」になり得る。「アキラ 7」では、「どうして、クッキー持ってくるの？」の答えとして、「アキラ 7」の発話「来月 3 月 14 日、クッキー持ってくるから」は「ホワイトデーだから」と考えられるため「理由」になる。「老人 6」では、「どうして、クッキーいらない？」の答えとして「老人 6」の発話「若い人が余計な気を使わなくていいですから。」は理由にならない。「アキラ 8」では、「どうして気を使いますか？」の答えとして、「アキラ 8」の発話「ルールだし。」は理由になる。

次にそれらの言いさし文から「から」と「し」を削除してみるとどのようになるかを見る。

「老人 5a」の発話では「いいから。」から「から」を削除すると「いい」となり、「老人 6」の発話では「いや、そんな若い人が余計な気をつかわなくていいです」となり、「アキラ 4」の発話では「し」を削除すると「いい」となる。「から」及び「し」を削除しても、内容は 100％言い尽くされていると言ってよい。また、言うべき後件を言わずに終わっているのでもない。なぜなら、この後、すぐ話者交代も行われているからである。従って、この「から」及び「し」はなくても良いが、話し手があえて、「から」、「し」を付加することにより、話し手のなんらかの心的態度を表す標識として機能していると考える。

先行研究では「から」は主観的に前件と後件を結びつける接続助詞であるとしていた。「から」は自己主張の強いマーカーであると言える。老人がここで使用している「から」は「から」の後に表出されていない話し手の「私の気持ちをわかってほしい」「私の気持ちを汲んで下さい」という話し手の心的態度が「から」によって示されているとも考えられる。先に述べた白川（2009）の「理由を表さない「カラ」の共通特徴」として、「S_2 には、必ず、命令・禁止・依頼・勧誘など、聞き手に何らかの行為をするよう働きかける表現がくる」また、この理由を表さない「から」は言いさし文の形で現れるのが群を抜いて多い」としている。これらのことからも、言いさし文の形はとっていても、「から」は話し手の心情をそのまま主観的に、聞き手に伝える談話効果を持つものと考えられる。

このデータから、「から」使用の言いさし文が若い世代で「し」に変わってきているのではないかとも考えられる[12]。つまり、若い世代では「から」は後件に強く話し手の意向を残すため、「し」の使用の方を選択し、突き放し、相手への受容要求は考慮しない伝達態度を示す「し」の使用を選好しているのではないだろうか。本稿の CM の

[12]「ロペ 3」の「から」の発話は高校生の使用である。「ですから」と丁寧形に接続している。ロペ（後輩）はアキラ（先輩）に対して敬体で話す特徴がある。

データからも「し」の言いさし文は、「独白」でも使用されている。その「独白性」にも、「し」と「から」の異なりが見られる。「から」も独白で使用されないことはないが、新しい「し」の言いさし文が持つ「ドライ」な感じは「から」より「し」の方が効果を示すと思われる。

次に、下記の例（24）（25）は、後件が「相手や第三者」への行為要求の文である。先でも述べたようにこれらの例では「から」の方が自然である。「し」でも非文とはならないが、「し」の場合は相手への行為要求より、つまり「相手や第三者」に行為要求する場合ではなく、話し手自身が行為を行う場合には、「し」でも自然になる。

(24)　皿が汚れている　｛? し・から｝　取り替えてください。（行為者→相手・第三者）
(25)　テレビの音がうるさい ｛? し・から｝ 音を小さくしろ。（行為者→相手・第三者）
(26)　もう時間が遅いです　｛し・から｝、そろそろ失礼します。（行為者→話者）
(27)　皿が汚れている　｛し・から｝　取り替えるとするか。（行為者→話者）
(28)　テレビの音がうるさい　｛し・から｝　音を小さくするね。（行為者→話者）

上記の例からも、「から」の場合は、条件接続で、前件が後件の理由となり、後件はその帰結となる論理関係を示す接続であるため、前件と後件の結びつきが強い。話し手は、確固たる理由の前件をあげ、後件には相手への依頼・要求などが来やすいと言える。一方「し」は先にも述べたが、前件と後件は、話し手が認識した事実であり、それらを繋ぐ接続関係である。話し手の一方的な認識を示す場合「し」は成立するが、上記例の「から」のように相手への、依頼、命令を示すものになると「から」に比べ自然ではない。「から」は相手への受容要求が強いと思われる。受容したかどうか、その結果まで関心があると考えるが、一方「し」は相手との認識の異なりを示すことができるが、受容要求については、結果までは考慮しないが、効果は示せるものと思われる。「し」は「から」ほど受容要求は強くないため、後件に相手への依頼、命令などが来ると「から」に比べ自然ではない。先の例（23）の「から」の言いさし文を、若い世代は「し」を使用していると考えられるのは、これらのことも関係するのではないかと思われる。「から」では結びつきが強く、「言いさし文」にしても表出していない後件に帰結の部分の可能性が残り、その部分を暗示させる効果まで「から」の言いさし文が持っているからではないだろうか。「し」のように言い放って、後は考慮しない突き放した感じが「から」では表せないのではないだろうか。「し」は若い世代にとって、「から」の言いさし文とは異なった、話し手の敢えて突き放すドライな態度を示す効果を持つと考える。しかし、これには、通時的な分析と数量的な分析、また使用動機の面から更なる検証を要するため、この点は今後の課題とする。

6．まとめと今後の課題

統語的特徴の上では「から」は接続助詞の論理関係標示（条件接続）に分類され、「原因結果関係」を表し、「し」は事態関係認識標示（列叙接続）であり、「並立接続」

を表す接続助詞である。「から」と「し」は南の分類でも同じC類に分類されていることから、従属節の独立性が高く、従属節のみで話し手の認識を示すことも可能である。両者とも言いさし文での使用が観察される。「から」は「〜のは〜からだ」の構文で、「〜からだ」の部分を焦点化することができ、理由を確定して強調する場合には「から」が適している。「し」は「〜のは〜しだ」の構文にはできないため、ある条件下では「理由」にもなり得るが、「並立」を基本とする。

語用論的機能として談話標識の「し」及び「から」の機能は、両者とも「発話する情報についての話者自身の伝達上の態度」、「相手の発話の受容のあり方に関する情報を示す」機能を持ち、知識管理は話し手が行う。「から」は、聞き手への受容要求が強い。「から」は確固たる理由を示し、聞き手への行為要求を促す場合に使用できるものと考える。周りとの同一認識状況では使用しにくい。両者とも反論に使用しやすい。また、「し」は、結論変更の可能性がない話し手の態度を示し、聞き手に対する主張を強め「受容要求」の結果は考慮しないが、その効果を示すことができる。この二つは同じ接続助詞であるが、「から」は、前件で確実な根拠・理由となり得るものをあげ、後件への行動を促す機能を持つ。一方「し」は論理関係ではなく、話し手が認識したまとまりとなる事実をつなぐものである。言いさし文となっても、「し」と「から」の二つの違いとなって表れているものと思われる。

最後に、若い世代で「し」の言いさし文が観察されるのは、言いさし文であっても、後件に強い意向を残す「から」ではなく、突き放したようなドライさを「し」が示す効果を持つためであると考える。しかし、この点は、通時的、数量的分析、使用動機の面からも更なる検証を要する。

参考文献

加藤重広（2001a）「文末助詞「ね」「よ」の談話構成機能」『富山大学人文学部紀要』35、pp.31-48

加藤重広（2001b）「談話標識の機能について」『東京大学言語学論集』20、pp.121-138、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部言語学研究室

加藤重広・町田健（編）（2004）『日本語語用論のしくみ』研究社

加藤重広（2006）『日本文法入門ハンドブック』研究社

国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞』国立国語研究所報告3、秀英出版

白川博之（2009）『「言いさし文」の研究』くろしお出版

日本語記述文法研究会編（2017）『現代日本語文法6 第11部　複文』くろしお出版

南不二男（1993）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店

森田良行（1980）『基礎日本語2』角川書店

森田良行（1984）『基礎日本語3』角川書店

（おおやま　たかこ・北海道大学大学院文学院専門研究員）